

ることができるとはではないか。

注

- 1 伊藤博「代作の問題」(『万葉集歌人と作品 上』塙書房、昭50。初出、昭32)。
- 2 大浦誠士「初期万葉の作者異伝をめぐって」(『万葉集の儀式と表現』笠間書院、平20。初出、平16)。
- 3 稲岡耕二「連作の嚆矢」(『万葉集の作品と方法』岩波書店、昭60。初出、昭58)。
- 4 市瀬雅之「左注に残された『類聚歌林』」(『万葉集編纂論』おうふう、平19。初出、平16)。
- 5 大浦前掲論文2。
- 6 例えば、内田賢徳「初期万葉論」(『万葉の歌人と作品 第一巻』和泉書院、平11)は、八番歌の「正しい解釈」は軍船進発の宣言であるとして、それは憶良や赤人の「後世の解釈」とは別のものであるという立場を取っている。
- 7 新川登亀男「大津皇子をとりまく知識人たち」(『道教をめぐる攻防』大修館書店、平11)。
- 8 折口信夫「万葉集短歌輪講 巻第一」(『折口信夫全集35』中央公論社、平10。初出、大10)。
- 9 一〇番歌の「岡の草根」を結ぶ行為については、影山尚之「斉明四年十月紀伊行幸と和歌」(『初期万葉論』笠間書院、平19)が、本稿と同じように、遊びとして捉える見方を示している。
- 10 八番歌の「船乗り」を神事として見る意見として、折口信夫「額田女王」(『折口信夫全集6』中央公論社、平7。初出、昭10)、多田一臣「額田王論」(『額田王論』若草書房、平13。初出、平7〜12)などがある。八番歌の「船乗り」が過剰な浪費の象徴として表現されているものであるならば、「船乗り」は神事という目的を持った行動としてうたわれることはない。本稿は、軍船進発説と同様、神事説にも与しない。
- 11 上野理「額田王と遊宴の歌」(『人麻呂の作歌活動』汲古書院、平12。初出、昭62)。
- 12 曾倉岑「額田王「熟田津」の歌の作歌時点」(『論集上代文学 第二十冊』笠

ジから八番歌を読むと、それは次に挙げる上野理(注11)のような理解となるだろう。

月の出る潮流の止まった満潮時は、船遊びに最適な条件を備えているが、こうした現実の条件とは別に、熟田津はのどかに船遊びを行うにふさわしい地名であり、月の出や満潮は、熟田津という地名表現とともに、船遊びの美しく平和で充足した気分をもちあげる表現としてふさわしい。そうした全ての面で条件の満たされた中での船遊びの始まりを額田王は宣言するのである。…(中略)…「今は漕ぎ出でな」という船遊び開始の宣言は、労働をする男女が歌いかわす民謡において、相手に対して行動を起こすように促す歌いかけに似るが、それがしっかりと働こうというのではなく、しっかりと遊ぼうという内容であり、しかも女の側からの歌いかけであるために、女が男に対して恋をしかけ、挑発する感じを伴わせ、将兵たちの耳には、船遊びや遊宴へと誘う、私的な愛の世界に誘惑する言葉となつて響いたのである。(波線及び傍線稿者)。

波線部に示したように上野は遊びの歌の源流を労働の民謡を想定しているが、この点を除けば、八番歌に「女が男に対して恋をしかけ、挑発する感じ」を見る理解に賛成したい。さらに具体的なイメージを示せば、次のようなものになる。「船乗り」は、曾倉岑(注12)が説くように、乗船の意である。乗船に際して月の出を待つのは、船遊びにふさわしいロケーションを待ためたであろう。遣新羅使人の歌に、

月読の光を清み 神島の磯廻の浦ゆ 船出すわれは(15・三五九九)
船に乗り海に入り路上にして作る歌)

月読の光を清み 夕なぎに水手の声呼び 浦廻漕ぐかも(15・三六二二、長門の浦より舶出せし夜、月の光を仰ぎ観て作る歌)

のように、自らの出航を月に誘われた船遊びであるかのようにうたう歌がある。月と潮という条件が満たされ、熟田津に船遊びにふさわしいロケーションが訪れたことを察知して、額田王は「今は漕ぎ出でな」と大宮人を船遊びに誘う。その船遊びは、斉明天皇にとつて、かつての舒明天皇と共

に行つた温泉行幸の愛の記憶を再現するものであつたのである。このように考えたとき、はじめて、八番歌左注の「天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり」の意味が明確になる。八番歌は舒明天皇を直接哀傷するものではないが、舒明天皇との愛の記憶の中の風景を再現することを、『類聚歌林』は哀傷と理解したのである。

斉明天皇は「御船西征」の途中に伊予温泉を訪れたのであるが、その旅は温泉行幸として表現され、そこでうたわれた八番歌は、温泉行幸の歌の様式に基づいてうたわれた。八番歌の「今は漕ぎ出でな」は、行幸に供奉する男たちを船遊びに誘い、これから行われる船遊びへの期待と心躍りを表明する。男たちを遊びに誘い、これから行われる遊びへの期待と心躍りを表明するうたい方は、儀式を遊びとして認識し、その遊びに男たちを誘うという点において、同じ斉明朝の温泉行幸の歌である一〇番歌の「いざ結びてな」と共通するものである。一〇番歌では草結びという遊びによって、温泉行幸という祝祭空間が出現した。これと同じように、遊びへの誘いを通して、「御船西征」の旅を温泉行幸という祝祭的空間へと転移しようとする。これが八番歌の意味である。

七 まとめ

温泉行幸は、七世紀に集中して現れる特殊な形態の行幸である。その目的が天皇の権力を過剰な浪費によつて表示することにあつたため、そこでは遊びが権力の表象として現れる。温泉行幸に参加する男女は恋人のように振るまい、遊びに熱中しなければならぬ。八番歌の意味は、このような文脈の中で理解するべきである。なお、遊びによつて権力を表象することは、温泉行幸に限定されるものではない。その後の宮廷社会のさまざまな場面で恋の歌がうたわれ、宮廷の過剰性が表出されることになる。恋によつて権力を表象する歌はさまざまイベントを契機として生み出されたが、その源流となつた重要なイベントの一つとして、温泉行幸を位置づけ

本稿では、紙数の関係から一〇番歌のみを取り扱う。この一〇番歌では、岩代の丘で草を結ぶことがうたわれている。岩代は現在の和歌山県日高郡南部町岩代であるとされる。折口信夫(注8)によれば、岩代とは「日高・牟婁の境で、異境視せられて居た熊野の入口に当る場処」であり、そこを無事に通るためには境の神に対する手向けが必要とされたという。手向けにはさまざまな方法があるが、岩代の場合は松が枝を結ぶものであったようである。有間皇子自傷歌として有名な一四二番歌では、「岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む」というように、自らの旅の無事を祈って松が枝が結ぶ皇子の姿がうたわれている。

一方、一〇番歌は同じ岩代でうたわれた歌でありながら、そこには旅の無事に対する祈りはうたわれていない。一〇番歌では、「君」に対して共に草を結ぶことを誘い、互いの長寿を祈る心がうたわれる。松が枝を結んで相手の長寿を祈る歌は、

たまきはる命は知らず 松が枝を結ぶころは長くとぞ思ふ

(6・一〇四三)

八千種の花は移ろふ 常磐なる松のさ枝をわれは結ばな

(20・四五〇一)

の二首がある。一〇四三番歌は、天平十六年(七四四)正月十一日、市原王と大伴家持が活道の岡の松の下で宴を行ったとき、大伴家持がうたった。また、四五〇一番歌は、天平宝字二年(七五六)二月の中臣清麻呂宅の宴において、同じく大伴家持がうたった。一〇四三番歌・四五〇一番歌は郊外や庭園において行われた宴席の歌であり、そこには真剣な祈りはない。あるのは、常緑の松にあやかり、永遠の命を願うという宴席の座興である。互いの長寿を祈る一〇番歌のうたい方は、一〇四三・四五〇一番歌と同じものである。つまり、中皇命たちが結んだ「岡の草根」は旅の無事を祈る呪物ではなく、その松も境の神が宿る神木として意識されたものではない。中皇命の一行は、郊外や庭園で催された宴席にいるかのようにふるまい、常緑の松にあやかり互いの長寿を祈るのである。そこには旅の無事を祈る呪術は排除されている(注9)。

斉明天皇紀伊行幸において、実際には、中皇命の一行は旅の無事を祈って岩代において松が枝を結んだかもしれない。しかし、中皇命は、草結びを、本来の呪術的な行為から意図的に逸脱した恋人同士遊びとしてうたった。温泉行幸という祝祭空間には、旅の無事を祈る呪術よりも、恋人同士の遊びの空間として表象されることが求められたからである。

六 八番歌の意味

ここで、赤人のうたった三二三番歌についても一度戻りたい。三二三番歌では、大宮人による熟田津の船乗りの様子がうたわれていた。『伊予国風土記逸文』『類聚歌林』には、熟田津の船乗りのことが記されている。熟田津の船乗りについて記されるのは、八番歌のみである。したがって、三二三番歌でうたわれる熟田津の船乗りは、八番歌を踏まえてうたわれたものであると考えられる。すると、三二三番歌でうたわれている熟田津の船乗りは、八番歌がうたわれた斉明七年の出来事を回顧したものであるということになる。三二三番歌は、伊予の温泉の風景に感動し、その風景を楽しむために、斉明天皇と共に船乗りするの大宮人の姿をうたっているのである。

三二三番歌の熟田津の船乗りは、舒明天皇と皇后の愛の記憶を語る三二三番歌と並べられることよって、共に伊予温泉行幸の華やかだった雰囲気色彩の場面として意味を与えられる。三二三番歌の熟田津の船乗りは、三二三番歌の舒明天皇と皇后の愛の記憶と同様、祝祭的イベントである温泉行幸を彩るものとしてうたわれているのである。温泉行幸の論理から考えれば、三二三番歌の船乗りは、その行為自体に目的のない、消費行動としての遊びとして行われるものでなければならぬ(注10)。昔の舒明天皇と皇后の華やかだった温泉行幸と同じような、華やかな祝祭的な雰囲気盛り上げるために、大宮人は船に乗って楽しく遊ぶのである。

三二三番歌の熟田津の船乗りのイメージを八番歌に当てはめてみると、八番歌も温泉行幸の歌として理解することができる。三二三番歌のイメー

⑥齊明四年（六五八）十月 紀温湯に幸す。

⑦天武十四年（六八六）十月 輕部朝臣足瀨・高田首新家・荒田尾連麻呂を信濃に遣して、行宮を造らしむ。蓋し、束間温湯に幸さむと擬はずか。

⑧大宝元年（七〇一）十月 車駕、武漏の温泉に至りたまふ。

とあるように、温泉行幸は七世紀前半の舒明天皇の頃から、七世紀の終りにかけて流行したものであることが分かる。温泉行幸の流行した時期から見て、新川登龜男（注7）が、

唐では、七世紀前半、太宗が長安の東郊の驪山温湯にしばしば行幸していた。この温湯行幸はただちにヤマトへも波及し、六三一年（舒明三）の舒明天皇一行の有馬温湯行幸にはじまる、一連の伊予温湯、牟婁温湯への行幸を生み出した。この間、六四八年（唐貞観二二）には太宗みづから驪山温湯碑をつくり、その銘文はただちに新羅にまで伝えられている（傍線稿者）。

と説くように、唐の太宗皇帝の温泉行幸が日本へと輸入されたと考えるべきであろう。新川が指摘する太宗皇帝の驪山温湯碑は、その拓本が敦煌から発見され、フランス国立博物館に所蔵されている。また、『三国史記』新羅本紀真徳王二年（六四八）条に、太宗皇帝自ら新羅の使者である金春秋に温湯碑・晋祠銘・『晋書』を授けたことが記されている。

太宗皇帝の驪山温泉碑には、「故知仙道迂闊。孰長齡之可希。未若下茲泉近怡情性者上矣。朕以憂勞積慮。風疾屢嬰。每濯患於斯源。不_レ移_レ時而獲_レ損」というように、神仙道に対する不信と温泉の効能に対する讚美のあとに、温泉行幸の目的が病氣療養であることが述べられている。皇帝の病氣が国家にとって重要でないわけではないが、温泉行幸の目的とする病氣療養とは政治的・宗教的な意味を持つものではない。皇帝の個人的な動機によって、すなわち、明確な政治的・宗教的な目的を持たずに大がかりな行幸を行うのは、皇帝にしかなしえない贅沢である。温泉行幸は、過剰な消費によって皇帝の権力を表象する祝祭的イベントなのである。その典型として、玄宗皇帝と楊貴妃の驪山温泉における遊樂がある。

『伊予国風土記逸文』『類聚歌林』において繰り返し回顧される舒明天皇の伊予温泉行幸も、太宗皇帝の驪山温泉行幸と同様に、過剰な消費を行うことを目的とした祝祭的イベントであった。このように考えると、舒明天皇と皇后の愛の記憶が、伊予温泉行幸にまつわるかたちで繰り返し現れる理由が理解できる。温泉行幸を主催する舒明天皇と皇后には、その祝祭性を盛り上げるために、自ら過剰な消費者の役を演ずることが求められる。その過剰な消費とは、愛の記憶として語られているさまじまな遊びである。伊予温泉行幸が実際にどのようなかたちで行われたものであったかは、不明である。ただし、伊予温泉において、天皇と皇后の仲睦まじい有様が演じられることによって、その行幸の空間は祝祭的な空間として表現される。温泉行幸の祝祭性は、天皇と皇后の愛によって支えられているのである。

五 温泉行幸と遊び

温泉行幸において遊ぶのは、温泉行幸の主催者である天皇と皇后だけではない。天皇・皇后と同様に、その行幸に参加する男や女は祝祭的な雰囲気を持ち上げるために楽しく遊ぶことが求められる。したがって、温泉行幸においては、遊ぶこと自体を目的とし、遊びを楽しむ歌がうたわれる。温泉行幸に参加して楽しそうに遊ぶ男女の姿は、自由に遊ぶことが許される祝祭空間を生み出した天皇の権力の大きさを表象している。このような温泉行幸の歌の典型例として、齊明天皇の紀温湯行幸のときにうたわれた中皇命の歌がある。

中皇命、紀の温泉に往しし時の御歌

君が代もわが代も知るや 岩代の丘の草根をいざ結びてな（1・10）
わが背子は仮廬作らず 草無くは小松が下の草を刈らさね（1・11）
わが欲りし野島は見せつ 底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ（1・12）
或は頭に云はく、わが欲りし子島は見しを

右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、天皇の御製歌云々。

き出すことはできない。そこにうたわれているのは、平和に船遊びに興じる大官人の姿である。三二二～三二三番歌の熟田津の船乗りのイメージは、軍船進発説にとつては都合の悪いものであった。そこで、従来、三二二～三二三番歌でうたわれる情景は、八番歌の熟田津の船乗りと異なるものとする立場が取られてきた(注6)。

しかし、軍船進発という解釈にこだわらなければ、八番歌と三二二～三三番歌の熟田津の船乗りが別の情景をうたっていると主張する必然性は失われる。むしろ、八番歌の意味を考えていくのの際して、三二二～三三番歌はほぼ同時代のイメージを指し示す資料として積極的に評価すべきであり、この歌から八番歌のイメージを構築していく必要があると考える。

三二二～三三番歌において注意したいのは、伊予温泉が舒明天皇と皇后の愛の記憶にまつわる場所として強調されている点である。熟田津の船乗りも、その愛の記憶を彩るものとしてある。三二二番歌には、「み湯の上の木群を見れば 臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変らず」とあるように、伊予の温泉の「臣の木」と「鳥の声」のことがうたわれている。臣の木については、『伊予国風土記逸文』に、

岡本の天皇と皇后と二躯を以ちて、一度と為す。時に、大殿戸に榎と臣木とあり。其の木に鶇と此米鳥と集まり止まりき。天皇、此の鳥の為に、枝に穂等を繋げて養ひたまひき。(『伊予国風土記逸文』、『釈

日本紀 卷十四』・『萬葉集註釋 卷第三』引用)
とあるように、舒明天皇と皇后が伊予の温泉に行ったとき、舒明天皇と皇后は、行宮の前の臣の木に稲穂を掛けて、鶇と此米鳥を養ったことが記されている。臣の木と鶇・此米鳥のことは有名だったらしく、六番歌左注に引用されている『類聚歌林』の中にも、

ただし、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、記に曰はく、天皇十一年己亥冬十二月、己巳朔壬午、伊予の温湯の宮に幸すといへり。一書に、是の時に宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に斑鳥・比米二つの鳥さはに集まれり。時に勅して多く稲穂を掛けてこれを養ひたまふ。すなはち作る歌といへり。

というように、二つの樹木と斑鳥・比米のことが記されている。臣の木と鳥の声は、伊予温泉行幸における舒明天皇と皇后の仲睦まじい様子の象徴として、伝えられていた。

三二二番歌で臣の木と鳥の声がうたわれているのは、かつて舒明天皇と皇后の宿った行宮の前に、昔と同じように鶇と此米鳥が群がっていたからだろう。三二二番歌は『伊予国風土記逸文』『類聚歌林』を踏まえ、その記事を契機として舒明天皇と皇后の伊予行幸のことを回顧している。八番歌左注引用の『類聚歌林』に載せられていた「昔日より猶し存れる物」は、八番歌左注の記述だけを見てもそれが何であるかよく分からないが、舒明天皇と皇后の伊予温泉行幸の記事の中に置いてみると、「昔日」とは舒明天皇・皇后の伊予温泉行幸であることが分かるし、「猶し存れる物」が二つの樹木と斑鳥・比米であったことが分かる。八番歌左注の『類聚歌林』は、八番歌が舒明天皇・皇后の愛の記憶と関わるものであることを主張している。

四 権力の表象装置としての温泉行幸

舒明天皇と皇后の愛の記憶のイメージは、熟田津にまつわるかたちで繰り返し現れる。では、なぜ、熟田津において、舒明天皇と皇后の愛の記憶のイメージが語られるのだろうか。この点について、温泉行幸という視点から考えてみたい。

温泉行幸とは、文字通り、天皇が温泉に行くことを目的として行幸することをいう。『日本書紀』『続日本紀』の温泉行幸の記事を見ると、

- ① 雄略三年(四五九)八月 穴穂天皇、沐浴まむと意して、山宮に幸す。
- ② 舒明三年(六三二)九月 津国の有間温泉に幸す。
- ③ 舒明九年十月(六三七) 有間温湯宮に幸す。
- ④ 舒明十一年十二月(六三九) 伊予温湯宮に幸す。
- ⑤ 孝徳天皇大化三年(六四五)十月 天皇、有間温湯に幸す。左右大臣・群卿大夫、従なり。

なほちこの歌は天皇の御製なり」という判断を下したと説くが、『類聚歌林』の記述が八番歌とは別の歌に対する注であった場合、なぜ左注筆者はこのような判断を下せたのか。『類聚歌林』の記述が八番歌に対するものであったからこそ、左注筆者は八番歌を天皇の御製であると判断し得たはずである。また、「ただし、額田王の歌は別に四首あり」という注も、天皇御製である八番歌以外に、額田王の歌が存在したことを示している。この注も、『類聚歌林』が天皇御製としての八番歌について記述していなければ、なぜ付けられているか理解することができない。この点から見て、八番歌左注の『類聚歌林』は八番歌に関する注として引用されていると考えられる。以上取り上げた諸説がいずれも『類聚歌林』の取り扱いに苦慮しているのは、八番歌を軍船進発の宣言の歌とする解釈から離れられないからである。軍船進発の場面においてうたわれた歌であると考え、「哀傷」は場面にそぐわない感情となってしまう。大浦（注5）は、万葉集中の「哀傷」を取り上げ、それが、

麻統王流於伊勢国伊良虞嶋之時人哀傷作歌（1・1・13）

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首

（2・1・65〜6）

同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首（3・4・13〜15）

哀傷長逝之弟歌一首并短歌（17・3・95〜9）

というように、いずれも「死者（あるいは不遇の流刑者）を悼む意」で用いられていることを指摘している。すなわち、八番歌を読む場合、軍船進発からは離れて、この歌は死者を回想し「哀傷」した歌であると読んでいくことが前提となるのである。『類聚歌林』の記述に素直に従えば、八番歌は「伊予の熟田津の石湯の行宮」で斉明天皇が「昔日より猶し存れる物」を御覧になって、亡き舒明天皇を回想し、「哀傷」して作った歌ということになる。八番歌の左注には「昔日より猶し存れる物」が何であるか明確に記されていないが、同じく熟田津の「船乗り」をうたった山部赤人の「山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌」（3・3・12〜13）を見ると、この「昔日より猶し存れる物」とは、舒明天皇・皇后（斉明天皇）が「昔日」

に行つた伊予温泉行幸の思い出のよすがとなる「臣の木」「鳥の声」であることが分かる（この点については、次章で述べる）。『類聚歌林』は、八番歌は舒明天皇・皇后の伊予温泉行幸を回想して作られた歌であると主張しているのである。

三 熟田津の船乗りのイメージ

八番歌がうたわれたと推測される斉明七年（六七二）から約六十年後の八世紀前半（おそらくは神龜年間）に、山部赤人は八番歌を踏まえて熟田津の船乗りをうたっている。

山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首 短歌を并せたり
皇神祖の 神の命の 敷きいます 国のことごと 湯はしも さはに
あれども 島山の 宜しき国と こそしかも 伊予の高嶺の 射狭庭
の 丘に立たして 歌思ひ 辞思はしし み湯の上の 木群を見れば
臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変わらず 遠き代に 神さ
びゆかむ 行幸処（3・3・12）

反歌

もしきの大宮人の 鮑田津に船乗りしけむ 年の知らなく

（3・3・13）

三三三番歌でうたわれる鮑田津（鮑田津は熟田津と同じ。赤人は、熟田津に「鮑く」の意を含めるために、鮑田津という表記を用いたらしい。以下、表記を熟田津に統一する）の船乗りは、軍船進発を表すものではない。三三三番歌で、伊予の温泉の風景がすばらしいことがうたわれていることから見て、大宮人が船乗りをしたのは、伊予の温泉の風景に感動し、その風景を楽しむためであったと考えられる。赤人は、伊予の湯の風景がそのままであるのに、それを楽しんだ大宮人の姿がすでないことを、三三三番歌の「遠き代に 神さびゆかむ 行幸処」という詠嘆と共鳴させるかたちでうたっている。三三二〜三三三番歌のイメージからは、百濟救援のために集結した軍船の群れも、戦勝を予感させるかのような勇壮な船出も導

乱として処理しようとする。このような処理には矛盾があるのではない。本稿は、八番歌と『類聚歌林』の記述との関係を再検討し、八番歌の意味を見直すことを目的とする。『類聚歌林』の記述に従えば、八番歌は舒明天皇の温泉行幸を回想するときとうたわれたとされる。本稿ではこの点に注目して、温泉行幸の歌として八番歌の意味を考察していきたいと考える。

二 八番歌と『類聚歌林』

はじめに、八番歌と『類聚歌林』の関係がどのように扱われてきたか、確認する。

澤瀉久孝『万葉集注釈』は、左注の混乱について次のように説明する。八番歌左注に引用される以前の『類聚歌林』において、「熟田津に船乗りせむと…」は「熟田津に泊てて見れば…」(仙覚『万葉集註釈』に「伊予国風土記ニ八後岡本天皇御歌曰、美积多頭尔波豆丁美礼婆云々」とあるもの。この歌が『類聚歌林』に載せられていたか否かは、不明である)の歌と共に併記されていた。そして、本来「熟田津に泊てて見れば…」に付けられていた「天皇、昔日より…哀傷したまふ」という注が、『類聚歌林』が八番歌左注に引用されるに際して、あたかも八番歌に対する注であるかのように「不用意」に加えられたのではないかと推測する。また、伊藤博(注1)は、歌群という視点を取り入れることによって、その「混乱」を合理的に説明しようとした。伊藤は、『類聚歌林』において、「哀傷」の歌が八番歌の前に数首存在し、哀傷↓覚醒という構成を持った歌群を構成していたと考える。そして、「天皇、昔日より…哀傷したまふ」という注は、その歌群全体に付せられていたものであったが、歌群の最後に位置する「熟田津に船乗りせむと…」のみを引用したために、歌と注との間に齟齬が生じたのだらうと述べている。

八番歌左注の記述を混乱と見て、「哀傷」を排除しようとする澤瀉・伊藤説にはいずれも問題がある。澤瀉のように左注の「天皇、昔日より…哀

傷したまふ」を「不用意」として排除するためには、それを「不用意」と見る根拠の提示が必要だろう。また、伊藤が歌群という視点を敢えて持ちだしたのはその澤瀉説の補強を意図するものであったのだから、大浦誠士(注2)が指摘するように、「哀傷↓覚醒」という連作的な構成を持った歌群の存在を斉明朝(六五五〜六六一)に想定することについては問題がある。稲岡耕二(注3)によれば、連作の嚆矢をなすのは、持統六年(六九二)の伊勢行幸においてうたわれた柿本人麻呂の留京三首(1・四〇〜四二)である。

澤瀉・伊藤説は『類聚歌林』の記述の一部を混乱として処理しようとしたものであったが、対して、八番歌左注に引用された『類聚歌林』の記述が本来八番歌とは別の歌に対して付けられた注であったというように、『類聚歌林』の記述そのものを八番歌から切り離そうとする市瀬雅之(注4)の意見もある。市瀬は「哀傷」について、「八番歌の船出を誘う内容には、「感愛の情」も「哀傷」も見いだすことができない。『類聚歌林』の内容が、八番歌の成立事情を語るものでないことは、誰しも認めるところ(傍線稿者)と考えられる」と説いた上で、この左注は『類聚歌林』の中では八番歌以外の歌(市瀬は、仙覚『万葉集註釈』所引「伊予国風土記逸文」の「熟田津に泊てて見れば…」であると推測している)に付けられていた注であると推測する。市瀬によれば、左注筆者は、八番歌が「後岡本宮御宇天皇代(斉明天皇)」の歌であることに注目して、『類聚歌林』に収載された斉明天皇の伊予国行幸に関する歌を見つけ、参考としてその成立事情を記したのだという。そして、その歌が天皇御製であったので、八番歌について「すなはちこの歌は天皇の御製なり」と判断するに至ったのだという。つまり、八番歌左注の『類聚歌林』の記事は、八番歌に対する説明としてではなく、斉明天皇の伊予行幸の事情を詳しく述べている記事として引用されているというのである。

ただし、市瀬の説くように『類聚歌林』の記述を別の歌に対して付けられた注として考えると、八番歌左注にいくつか理解できない部分が生じってしまうことになる。市瀬は、『類聚歌林』の記事を根拠として、左注筆者が「す

温泉行幸の歌 — 万葉集八番歌考 —

福 沢 健

A Song of the Imperial Visit to a Hot Spring : A Study of Manyōshū Song 8

Takeshi Fukuzawa

(二〇〇八年十一月二十八日受理)

額田王の歌

額田津に船乗せむと月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな (一・八)

右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、飛鳥岡本宮に天の下知らしめしし天皇の元年己丑、九年丁酉の十二月己巳朔壬午、天皇・太后、伊予の湯の宮に幸す。後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征して始めて海路に就く。庚戌、御船、伊予の額田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。すなはちこの歌は天皇の御製なり。ただし、額田王の歌は別に四首あり。

一 問題の所在

万葉集八番歌については、これを軍船の筑紫への進発を宣言する歌とする解釈(軍船進発説)が多くの論者によって広く支持されてきた。しかし、八番歌自身は、この「船」が軍船であり、「船乗り」が筑紫にむけての進発であることを直接語らない。八番歌では、「船」を「今は漕ぎ出でな」という出航の指示がうたわれるのみである。

軍船進発説のよりどころとなるのは、左注が引用する『類聚歌林』中の「御船西征して始めて海路に就く」という記述である。この記述は『日本書紀』齊明天皇七年正月条からの引用である。『日本書紀』によれば、「御船西征」に至る経緯は次のとおりである。齊明天皇六年(六六〇)七月、百済が滅亡する。同年十月、百済の遺臣鬼室福信は日本へと使者を送り、百済王子豊璋の帰国と援軍の派遣を要請する。七年正月、福信の要請に於いて、齊明天皇自らが筑紫へと進発した。「御船西征」は、この齊明天皇の親征を指す。『類聚歌林』は、八番歌が齊明天皇の「御船西征」の途上でうたわれたことを主張している。

ただし、『類聚歌林』には、八番歌が軍船進発を宣言した歌であるとは記されていない。『類聚歌林』の説明は、「天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふ」とあるように、八番歌は齊明天皇が昔の行幸を回顧してうたう「哀傷」の歌であったと記されている。一見すると、「哀傷」は軍船進発を宣言する勇壮な場面にはそぐわない感情である。そこで、『類聚歌林』の「哀傷」云々の記述は、左注の段階で何らかの混乱が生じたのだろうという予測のもとに排除されてきた。

軍船進発説は、『類聚歌林』の記述に依りながら、都合の悪い記述は混